

消火栓訓練マニュアル

消火栓を使用する時は必ず4人以上で行う。

A 消火栓係(1名) B 筒先係(2名) C 伝令係(1名)の役割を決める。

※筒先は思いの外ものすごい水圧がかかり、振り回されたり、ホースを離れてしまったり筒先が大暴れすることがあるので、必ず2名です。

1 消火栓蓋を開ける(消火栓係)。

1.1 蓋の下方、左右にある凹みを消火栓キー剣先で押して、ロックを解除します。(片方だけでも構わない。)

1.2 (「1.1」からの継続で、)剣先を蓋とロックの隙間に差し込み、てこの要領で持ち上げる。

1.3 蓋が浮き上がったなら、取っ手を持って蓋を開きます。(蓋が持ち上がらない場合はハンマー等で端4辺を軽くたたきと持ち上がりやすい)



蓋を開け、ロックが解除された状態を撮影しました。蓋を閉めると錘の効果でツメが蓋枠の下に潜り込み、ロックが掛かる。

オレンジ色の○枠内でロックのツメ回転部直上に隙間が見えます。蓋側に斜めの切り欠きがあり、ここに剣先を差し込む。

2 消火栓吐水口にスタンドパイプを結合する(消火栓係)。

2.1 フタを開け、消火栓吐水口に土などが付いていないことを確認する。

2.2 スタンドパイプを消火栓吐水口に直上から押し込む。

結合後、スタンドパイプを上につけ、スタンドパイプが外れないことを確認する。(声出し確認)

スタンドパイプを立てる前に消火栓を操作して少し水を出し、吐水確認と併せて異物除去を行うことができる。



吐水口(フタしてある状態)

消火栓キー差込口

3 消火ホースを延ばす(筒先係と伝令係)。

消火ホース2本と筒先を2人で分担して運ぶ。

3.1 メス金具が下になるようにホースを立てて置く。

3.2 オス金具を右手で持ち、左手はホースに添える。

左手を添えることで、右手を動かしたときにホースが横に倒れ難くなる。

3.3 右足先でメス金具を押さえる。ホースを延ばすときはホースを前方へ転がすようにする。

(ボーリングのボールを投げるような感じ)

3.4 ホースを延ばすときは、必ず前方の安全に注意する。

ホースの延長方向に人が居るときは声を出して知らせる。

延長方向に障害物があるときは、敢えて広い方向へ緩めに延ばし、補助者と協同で延長する。

3.5 ひとつの消火用具ボックスには2本のホースが入っており、ホース1本の長さは20mである。

消火の必要な場所までの距離が遠いときは、別の場所の消火用具ボックスからホースを持って来て、継ぎ足して延長する。

※ 自治会独自で行う訓練で、消火栓から放水するときは、市への許可と、消防機関の立会をしていただく必要がある。



ホース結合後は、しっかりと引っ張って結合を確認する。
外れないことをチェックして、『よし!』と声に出して確認する。(声出し確認)

1本目を延ばし、その場所で2本目と結合した後、2本目のホースを腰付近で抱えて走り、1本目が延びきったところで、ホースを地面に下ろして2本目を延ばす。

4 ホースをスタンドパイプと結合する(消火栓係)。ホースを筒先と結合する(筒先係)。

それぞれのオス金具とメス金具とを右手と左手を使って、ねじるように結合する。

結合の状態を引っ張って確認する。(声出し確認「よし!」)



5 放水を開始する。放水をやめる。

5.1 筒先係の放水準備が整ったら、後ろにいる伝令係に、右手を挙げ、「放水はじめ」と号令をかける。伝令係も「放水はじめ」と呼応する。筒先係はいつ水がきてもよいように、筒先を火元へ向けて構える。伝令係は、延ばしたホースの上をたどりながら、消火栓係の元へ走っていき、右手を挙げ、「放水はじめ」と号令をかける。消火栓係も右手を上げ、「放水はじめ」と呼応する。伝令係は再びホースの上をたどりながら筒先係へ走って戻り、次の筒先からの指示を待つ。

なお、放水圧力の強弱や必要放水量について、筒先から伝令を通じて消火栓係へ送水の調整を指示する。

伝令係は、筒先係からの伝令を消火栓係へ伝えた後は、また元に戻って筒先の次の指示を待つ。

放水をやめる時は、筒先係から伝令へ、右手を水平にあげ、「放水やめ」と伝え、伝令係は同じく右手を

水平にあげて「放水やめ」と呼応し、先ほどからの手順どおり、消火栓係の前へ走っていき、右手を

水平にあげて「放水やめ」と伝え、同じく消火栓係も右手を水平に上げ、「放水やめ」と呼応する。

5.3 消火栓係は、消火栓キーを時計回りに、必ずゆっくりと回して閉止する。



6 活動の基本

6.1 まずは、「火事だー、火事だー」と周囲に呼びかけて、多くの人を集める。

率先して「あれしろ、これしろ」と言う人が居ること、同時にそうした指示を受けて動く複数の人が居ないと消火

活動はできない。

大災害時では公設消防隊の到着が遅れ、自治会の自衛活動が重要となるおそれがある。

6.2 消防への通報(119番)を忘れないこと。

誰かが通報してくれているとの思い込みが通報の遅れとなる。

6.3 周囲の状況に注意して、安全に活動する。

6.4 片付け完了までが消火活動である。

例えば、消火栓蓋を開けたときは、蓋が歪(いびつ)にならないように閉める。

車道であれば、蓋が変形して蓋が開かなくなる原因となる。